

## 西夏文字に親しむ

神戸市外国語大学非常勤講師 佐藤 貴保

### はじめに

かな文字や契丹文字、女真文字、<sup>チューノム</sup>字喃など東アジア各地で独自の文字が創製されたころ、中国西北方で生まれた文字が西夏文字である。

西夏文字は1030年代、西夏（1038～1227年）の初代皇帝李元昊<sup>りげんこう</sup>が支配者階級のチベット系タングート族の言葉（西夏語）を表記するために、学者<sup>や</sup>野利仁栄<sup>りじんえい</sup>につくらせたとされる。一文字で一音節を表示する表意文字であり、合わせて約六千字が知られている。

今この文字を用い、西夏語を話す者はいない。誰も使わなくなっていた西夏文字がどのようにして解説されたのか、なぜこのような文字をつくったのか、西夏文字はどのような特徴を持っているのかを簡単に説明する。

### 1 西夏文字の発見と解説

西夏文字は西夏滅亡後も16世紀の明代まで使用されていたことが確認されているが、その後この文字を用いる者はいなくなった。19世紀末になって、いくつかの碑文や古銭に刻まれている奇怪な文字が西夏文字であると認識され、さらに1908年には、ロシアの探検隊がカラホト遺跡（別名黒水城<sup>くすいじょう</sup>。中国内モンゴル自治区エチナ旗）から大量の西夏文字資料を発見し、研究が徐々に進んだ。20世紀後半には、日本の西田龍雄<sup>にしだ たつお</sup>・京都大学名誉教授らによって文字の意味や発音などが体系的に解明された。現在、約8割の文字の意味が明らかになっており、字書も刊行されている。

西夏文字の解説が進んだ理由は、西夏語と漢語のバイリンガル資料やチベット語・漢語（中国語）から翻訳された資料が豊富に存在したことにある。カラホト遺跡からは、西夏語と漢語対訳の単語帳（図1）が発見され、主要な文字の意味や発音が

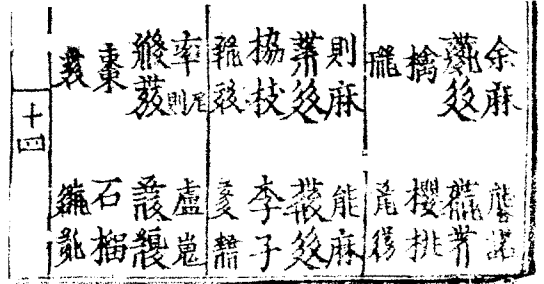


図1 西夏語・漢語単語帳（カラホト出土、12世紀。『俄藏黒水城文献 10』より転載）中央に西夏語と漢語の単語、西夏語の右側には漢字で西夏語の発音法を、漢語の左側には西夏文字で漢語の発音法をそれぞれ表記している。

明らかになった。このほかにも、発音別に配列された西夏文字の字書が発見されたことにより、西夏語の音韻体系が解明された。

一般に10～12世紀の西夏や遼（契丹）、金（女真）や日本など、中国の周辺諸国ではこの時代、中国とは一線を画した独自の「国風文化」が開花したとされているが、西夏では中国（当時は宋）やチベットの文化を排除することなく貪欲に吸収し、それらを西夏語に翻訳、出版していた。とくに『孫子』『孝経』など中国の著名な古典や、漢語・チベット語の仏典が西夏語に翻訳されていたため、そうした訳本の存在も解説の大きな助けとなった。

一方、西夏の隣国遼・金でつくられた契丹文字と女真文字については、漢語とのバイリンガル資料や漢語からの翻訳資料が極めて少ない。そもそも翻訳事業そのものが遼・金ではあまり行われなかったらしい。その結果、西夏文字ほど解説が進んでいないのである。

### 2 なぜ独自の文字をつくったのか？

筆者は、大学の講義や高校での講演などで西夏文字を書いてみせることがある。その時に聴衆から寄せられる声の多くは、「こんな複雑な文字を

使わない日本に生れてよかった」「西夏はなぜこんな難しい文字をつくったのか?」「実用性はなかったのではないか?」といったものである。

西夏の支配地域には西夏による征服以前から多数の漢族やチベット族、ウイグル族が居住し、それぞれ独自の文字をすでに持っていた。実際、漢字やチベット文字は西夏による征服後も従来どおり使用されていた。ならば、征服当初文字を持っていなかったタングート族には、既存の漢字やチベット文字を借用して西夏語を表現するという選択肢もあったはずである。にもかかわらず、なぜ独自の文字を創製したのか。その理由の一つには、タングート族独自の文字を持ちたいという征服者の願望があげられるかもしれない。

しかし、タングート族が独自の文字を作成した背景には他の要因も考えられる。それは、西夏語の持つ特性である。西夏語には105種類にも及ぶ韻母（母音）が存在する。これに30種類以上の声母（子音）が加わる。さらに、日本語や漢語のように、同音異義語が多数あるため、表音文字だけでは不都合な場合が多い。このような西夏語の特徴を文字で表現するために、既存の文字を借用するのではなく、新しい文字を創製する選択を採った可能性も考慮されるべきである。

### 3 西夏文字は本当に難しいのか?

教科書や図説の写真、そして前節で引用した聴衆の意見にもあるとおり、たしかに、西夏文字は見るからに画数の多い複雑な文字である。最も画数の少ない字でも四画ある。このような文字が本当に実用されたのかという疑問が出て無理はないだろう。

ただ、カラホト遺跡から発見された資料の中には、西夏の役人たちが残した西夏文字の手紙や練習帳が含まれており、実用されていたことは確かである。字の複雑さだけでは、実用性の有無は論じられない。

そもそも、西夏文字は漢字よりも難しいのだろうか。西夏が建国された当時、東アジア世界で使われていた漢字は、一般に「旧字体」と呼ばれる画数の多い文字である。現在日本の学校で教えている常用漢字の多くは、太平洋戦争後につくられ

た、画数を減らして簡略化した新しい漢字であり、それ以前は旧字体で表記していた。中華人民共和国ではさらに簡略した「簡体字」がつくられている（台湾では旧字体を現在でも使用）。西夏文字と漢字の画数を比べる際に、日本の常用漢字と比べても意味がない。当時の人々の目線で、つまり当時使われていた旧字体の漢字と西夏文字とを比較して考えなくてはならない。

実際のところ、西夏文字の方が旧字体の漢字よりも少ない画数で書けるものが多数ある。たとえば、「サクラ」は西夏文字では16画の字で表記する。日本の常用漢字では「桜」と10画で書けるが、旧字体では「櫻」と書き、21画にもなる。

数字の表記の場合はどうか。私たちは日付などを漢数字で書く場合「一、二、三・・・」と表記する。総じて西夏文字とは比較にならないほど画数は少ない。だが領収書や帳簿など、改ざんされては困るような数字を記す場合には「壹（または壺）、貳（または貳）、参・・・」という「大字」とよばれる画数の多い表記を使う。西夏の人々の識字率はあまり高くなく、読み書きができるのは役人や商人、僧侶ぐらいであったものとみられる。彼らにとって数字を使用する頻度が最も高いのは、物品の数量などを帳簿に記録するときである。そこで西夏文字の数詞と漢字の大字とを図2で比べてみると、西夏文字の方が漢字の大字よりも少ない画数ですむ場合が多いことがわかる。

	西夏文字	漢字の大字
一	𐽀 (6)	壹 (12)
二	𐽁 (9)	貳 (12)
三	𐽂 (13)	参 (11)
四	𐽃 (11)	肆 (13)
五	𐽄 (10)	伍 (6)
六	𐽅 (10)	陸 (11)
七	𐽆 (13)	柒 (9)
八	𐽇 (6)	捌 (10)
九	𐽈 (7)	玖 (7)
十	𐽉 (9)	拾 (9)

図2 西夏文字の数詞と漢字の大字（カッコ内は画数）

また、文字の作り方にも工夫がなされている。西夏文字には漢字のように「へん」や「つくり」「かんむり」のような部首が存在し、漢字の会意文字や形声文字のような文字構成を持つものが多い。た

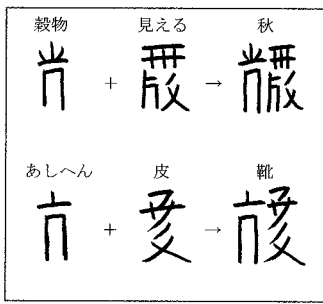


図3 西夏文字の構造例

例えば、「穀物」を表す部首と「見える」という文字を組み合わせ、実りの季節すなわち「秋」という文字がつけられた。「靴」という意味の西夏文字は、漢字の「あしへん」に相当する部首と「皮」という意味の文字を組み合わせられてつくられている(図3)。このように西夏文字は意味を推測しやすい構造をしている。覚えやすさ、わかりやすさを意識してつくられたのかもしれない。

おわりに～西夏文字で名前を書いてみよう～

カラホト遺跡で西夏文字資料が発見されてからまもなく百年を迎える。百年にわたる研究の進展

により、大部分の文字の意味と発音が明らかにされ、現在では日本人の名前を発音の近似した西夏文字で表記することも可能になっている。西夏語の研究者である荒川慎太郎・東京外国語大学准教授は、西夏文字による日本語の五十音の表記例を発表している(図4)。漢字と比べ筆画はやや直線的だが、書き方は漢字やカタカナに似ている。自分の名前を西夏文字で書いてみてはどうだろう。ある高校の生徒向けの講演で、図4を提示しながら筆者がある生徒の苗字を西夏文字で書いてみせたところ、その高校の生徒の間で西夏文字で名前を書くことが一時期流行したという。どうやら、西夏文字は高校生の好奇心を引き出す力を持っているらしい。

外国の過去の文化を私たちが体験することは難しい。しかし、文字を書いてみたり、文字や単語の成り立ちを知ったりすることによって、当時の人々の感覚や生活のありように少しでも迫ることができるだろう。西夏の歴史は教科書では数行程度しか扱われないが、西夏文字に限らず、他国の文字を書いてみる—自分の名前を他国の文字で書いてみるetc.—という「異文化体験」の場が世界史の授業の中に設けられてもよいのではないだろうか。

撥音	ば	ば	だ	ざ	が	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	𐰇	𐰈	𐰉	𐰊	𐰋	𐰌	𐰍	𐰎	𐰏	𐰐	𐰑	𐰒	𐰓	𐰔	𐰕
刻	び	び	ぢ	じ	ぎ		り		み	ひ	に	ち	し	き	い
	𐰖	𐰗	𐰘	𐰙	𐰚		𐰛		𐰜	𐰝	𐰞	𐰟	𐰠	𐰡	𐰢
長母音	ぶ	ぶ	づ	ず	ぐ	を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	𐰄	𐰅	𐰆	𐰇	𐰈	𐰉	𐰊	𐰋	𐰌	𐰍	𐰎	𐰏	𐰐	𐰑	𐰒
羸	べ	べ	で	ぜ	げ		れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
	𐰓	𐰔	𐰕	𐰖	𐰗		𐰘		𐰙	𐰚	𐰛	𐰜	𐰝	𐰞	𐰟
	ぼ	ぼ	ど	ぞ	ご	ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
	𐰠	𐰡	𐰢	𐰣	𐰤	𐰥	𐰦	𐰧	𐰨	𐰩	𐰪	𐰫	𐰬	𐰭	𐰮

※拗音は、や行をやや小さめに書く

図4 西夏文字による日本語五十音表記例(荒川慎太郎「西夏文字で名前を書く1」『月刊みんぱく』2005年2月号、p.16-17より)